

意見陳述書

2016年（平成28年）3月18日

佐賀地方裁判所民事部合議2係 御中

原告 李 政 美

私は在日韓国人二世で、歌手の^{イチョンミ}李政美と申します。

私の両親は、幼い時に朝鮮半島・済州島から日本に渡ってきました。私は日本で生まれ育ちましたが、両親の生まれた韓国も、私が生まれ育った日本も、大切な故郷だと思っています。原発の問題は日本だけでなく、私のもう一つの故郷である韓国にも、延いては地球の存続にも関わる重大な問題です。

私は、20代の頃から原発の問題に関心を持ち、原発がなくなることを願ってきましたが、福島第一原発事故以降、積極的に「反原発」への切実な願いを歌の活動の中で表すようになりました。

この裁判ではすでに多くの方々がそれぞれの立場から意見陳述をされていますが、私は歌手として、この地球上から全ての原発をなくしたいという思いをこれから述べさせていただきます。

私は音楽大学卒業後、定時制高校の講師や肉体労働をしながら歌手活動を続けていました。20代後半から、どんな声で、何を歌いたいのかと悩み、歌うことをあきらめていた時期がありました。

そんな時に、詩人山尾三省さんと出会う機会がありました。三省さんは東京で生まれ育ちましたが、1977年に家族と共に屋久島に移り住みました。厳しい自然の中、自給自足の生活をしながら詩作りを続けていました。また、早くから原発の危険性を訴え、山から水を引き、薪を拾って風呂を焚くという、最小限のエネルギーでの暮らしを実践されていました。

私は、三省さんの言葉に触れて、物質的な豊かさや便利さを追求する暮らしが人間の幸福に繋がるのではないということに気づかされました。三省さんの生き方は、今でも私の生き方の指針になっています。

また、「祈り」の朗読を聴いた瞬間、歌の始まりは「祈り」だったのではないか、そして、私自身の深い祈りを声で表したいという強い思いがこみ上げてきたのを鮮烈におぼえています。

その後「祈り」に曲をつけて歌ったのをきっかけに活動を再開し、私自身の祈りを歌い続けています。とりわけ3.11以降は、東日本大震災の被災地で、福島で、そして原発を止めなければならないという思いの人々の集う場所で「祈り」を歌う機会が多くありました。

「祈り」の歌の一部を紹介します

南無浄瑠璃光

海の薬師如来

われらの病んだ心身を 癒したまえ

その深い 青の呼吸で 癒したまえ

南無浄瑠璃光

われら人の内なる薬師如来

われらの病んだ科学を 癒したまえ

科学をして すべてのいのちに奉仕する 手だてとなしたまえ

南無浄瑠璃光

大地の薬師如来

われらの病んだ文明を 癒したまえ

その深い 青の呼吸の あなたご自身を あらわしたまえ

オンコロコロ センダリマトウギ ソワカ

この詩は、薬師如来への祈りを歌っています。瑠璃光とは夜明けの真っ青な空の

色だそうです。宇宙から見たこの地球は、まさにこの瑠璃光そのものなのではないかと思えます。地球は、本当に美しくかけがえのないものです。

「オンコロコロ センダリマトウギ ソワカ」は薬師如来の真言で、心と体を癒す呪文のようなものです。

長い人類の歴史の中のわずかこの数百年の間に、私たち人間は豊かさと便利さを求めて文明を貪ってきました。その結果、我ら生類の幸福のための手立てであるはずの科学が、生命を奪い、地球を滅ぼす道具とも成り果ててしまいました。原発事故は正にその最たるものです。

私は、福島第一原発の事故が起こるまで、原発の怖さは知っているつもりでしたが、無知と想像力の貧しさゆえに切実な危機感を持っていませんでした。私たち一人一人の欲望と無知が、福島第一原発事故を生み、この世界の現実を作り出しているのだと痛切に感じています。

三省さんは2001年に亡くなりましたが、次のような3つの「遺言」を残されました。

- 1、日本中のどこの川の水も屋久島の水のように飲めるようにしてほしい
- 2、この世界から全ての原子力発電、核兵器を無くしてほしい
- 3、世界のすべての国が武力と戦争を永久放棄してほしい

とりわけ、2つめの遺言では、「自分達の手で作った手に負える発電装置で、すべての電力がまかなえることが、これからの現実的な幸福の第一条件である」と語っています。まるで、3. 11後の世界の有り様を予言していたかのようです。

「祈り」の詩もまた、彼の遺言そのものだったと思います。3. 11以降、この詩の言葉のひとつひとつがあまりにも切実なものとして胸に突き刺さってきますが、同時に希望の呪文のようにも聞こえてきます。

今なら、まだ間に合うのだと。

そして私は、オンコロコロ、オンコロコロと、呪文のように歌い続けます。

東日本大震災の直後から、歌が何かの役に立つのだろうかと自分に問いながら、居ても立ってもいられず、福島をはじめ東北の被災地へ何度も歌いにいきました。

避難所や小学校、仮設住宅など数多くの場所で歌いましたが、福島のある仮設住宅で歌った時の出来事は今でも忘れることができません。

唱歌「ふるさと」を歌った時に急に泣き出して、コンサート会場の集会室から飛び出して行かれた女性がいたのです。原発避難区域から避難していた方でした。しばらくして集会室に戻って来られましたが、最後まで泣きながら歌を聴いてらっしゃいました。

『「ふるさと」は歌えない...』という声は他のところでも何度も聞きました。原発事故によって故郷を奪われた人たちにとって「ふるさと」という言葉自体がトラウマになっているのだと感じました。

福島を訪れる度に、その自然の豊かさ、美しさに圧倒されます。こんなにも美しい故郷を見えない放射能で汚染され、破壊され、奪われてしまった福島の人々の怒りと悲しみは計り知れません。福島で暮らす友人、知人の多くが放射能の影響だけではなく、怒りと悲しみ、ストレスから体調を崩しています。福島の親しい友人武藤類子さんからは、昨年だけで、友人・知人が8人も亡くなったと聞きました。詳細は、原発事故後発症のガンが2人、どちらも50代。悪性リンパ腫が1人、40代。突然死が5人、20代～60代、だそうです。原発事故との因果関係は証明されていませんが、夥しい数の人たちに健康被害が起きていることはまぎれもない事実です。

玄海原発が再稼働されれば、福島と同じように数多くの人たちが生命の危険にさらされ、恐怖に怯えながら暮らさなければなりません。事故が起きれば、放射能は日本だけではなく、玄界灘を越えて両親の故郷にも降りつもるでしょう。日本列島だけではなく、朝鮮半島の多くの人々が故郷を失うことになります。

この本当に美しい私たちの故郷が、私たちの欲望が作り出した科学と文明によってこれ以上破壊されないことを、そして、子どもたち、孫たちの世代に手渡すことができますよう、私は、心から祈り、歌い続けたいと思います。

以 上